三郎山論集７（上田女子短期大学　日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）2000.3

＊会員の声　留学生との思い出

宮下絵里

本年度は、上田女子短期大学留学生として、袁桂紅さんと降瑜さんが中国から来られました。日本語教育研究会の活動を通じて、私はお二人と親しくなり、いろいろな話をしたり、さまざまな活動を共に行ないました。学内はもちろんのこと、学外でもご一緒する機会が多く、たくさんの思い出ができました。

学外での活動のうち、特に印象的なのは、11月に長野市立篠ノ井西小学校で行なわれた「アジアの方々との交流会」に、袁さん・降さんと一緒に参加したことです。留学生を中心としたアジア各国の方々と小学生が、クイズやゲームを通じて、交流をはかりました。私自身は、中学校での教育実習を経験したばかりでしたが、小学生も、中学生とは違ったかわいらしさがあると感じました。最後は、袁さん・降さんと一緒にサイン攻めに遭いました。お二人とも、小学生の歓迎ぶりをとても喜んでいました。

このほか、日本語教育研究会のメンバーみんなで、お二人の下宿を訪れ、一緒に料理を作ったりもしました。もちろん、中華料理を作るのですが、手作りの餃子の味は忘れられません。皮から作る餃子は初めての経験で、本当においしかったです。他にも、たくさんの手料理を教えていただきましたが、どれもたいへんお上手で、おかげさまで、私たちのレパートリーも広がりました。

袁さん・降さんと過ごした時間は短く、あっという間に過ぎてしまいました。お二人とも初めての日本で、たいへんなことも多かったと思います。が、いつも熱心に勉強されていて、その姿に襟を正す思いをすることがしばしばでした。いろいろなことを教えていただきましたが、やはり中国に関するさまざまなことが記憶に残ります。生活習慣などの身近なことから、言葉や文化、さらには中国という国全体についてのことまで、詳しく話してくださいました。

袁さん・降さんのおかげで、中国に対する私自身の関心は以前よりも強くなり、より身近に感じるようになりました。お二人から学んだことを、私のこれからの国際理解活動に生かしていきたいと思います。　（みやした　えり／国文科２年）

三郎山論集７（上田女子短期大学　日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）2000.3

＊会員の声　留学生との思い出

水　野　理津子

私の短大生活は、もうすぐ終わりを迎える。短大２年生になってからの１年間は、かなり充実していたと言える。

私は、２年生になって、何か新しいことを始めたいと思った。そこで、日本語教育研究会に入った。それと同時に、毎週土曜日に丸子町で行なわれているボランティアの日本語教室にも通うことにした。新しいことを始めるのは、とても勇気がいるが、何事も始めなければ始まらない。私はいつになく前向きであった。

そして、新しいことがもう一つあった。それは、中国からの留学生、袁桂紅さん・降瑜さんとの出会いである。袁さんは、日本での生活で不安も多いはずであるのに、常に周囲の人に優しく、頼りない私を心配し、助けてくれた。降さんは、会うといつも笑顔で話しかけてくれて、私はその笑顔に魅了された。

また、降さんとは、毎週月曜日に、同じ会員の宮下絵里さんと３人で日本語を勉強した。初めのうちは、言いたいことがうまく伝わらなくて、中国語の辞書と日本語の辞書を見ながら会話をしていた。その時は、お互いに何とも言えない汗をかき、緊張して喉がカラカラになったりした。しかし、毎週、回を重ねるごとに、お互いの意志伝達もスムーズにできるようになった。中国に帰国する12月には、降さんの日本語はかなり上達した。それは降さんが常に日本語を覚えようと、努力をしていたからであろう。そのような努力家の降さんだからこそ、私たちは応援してあげたくなったのである。

私は、袁さん・降さんに出会えて本当にうれしかった。お二人のおかげで、中国語も、少しではあるが、覚えることができた。これからも中国語の勉強を続けて、北京にいるお二人に会いに行こうと思う。その日を楽しみにしている。

（みずの　りつこ／国文科２年）

＊会員の声

日本語教育研究会に入って

中　野　裕美子

日本語教育研究会に入って、いろいろなことを学ぶことができました。まず、文化祭の時に、佐久市の「すずらんの会」の方をはじめ、さまざまな日本語教育関係の方々と交流ができました。そして、何よりも嬉しかったことは、短い期間でしたが、中国からの留学生と一緒に活動できたことです。

私は、まだ勉強を始めたばかりで、日本語を教えたことはありませんが、これからいろいろな人たちと交流をはかり、その中で、日本語を学びたいという外国出身の方がいれば一緒に日本語を学んでみたいと思います。そのために、この日本語教育研究会での活動を活発に行なう一方で、ボランティアの現場にも参加してみたいと思っています。自分自身にできることで、お役に立てることを見つけてみたいです。ささやかなことからしか取り組めないかもしれませんが、日本語学習のお手伝いができるならば、どんなことでもチャレンジするつもりです。

日本語教育研究会に入る前は、「研究会」というカタイ名前から、少し不安がありましたが、先生や先輩方とのお話がとても楽しく、わからないこともすぐにアドバイスがもらえて、安心しました。先輩方との活動は、３月までと思うと、なんだかとても寂しいです。これからも、ずっと良き先輩でいてほしいと願っています。

その先輩方は、日本語教室ボランティアとして、活躍されていましたが、私も見習いたいと思います。４月からは、また新しい留学生を迎えると思いますが、今年度以上に、留学生の方々と交流できたらいいな、と思っています。そして、日本語を学びたいという多くの人たちに、日本のことをもっと知ってもらえるように、私自身、幅広い知識を身につけて、日本語のみならず日本の文化についても教えることができるようになりたいです。

今年１年の活動を通じて、国や、文化・風土が違っても、「言葉」を交わすことによって、お互いにいろいろなことが学べると実感しました。これからも、たくさんの人から学びたいです。

（なかの　ゆみこ／国文科１年）

三郎山論集７（上田女子短期大学　日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）2000.3

＊会員の声　夢にむかって

成澤美樹

「日本語教師になりたい」

こう考えるようになって、２年くらいになるだろうか。はじめは、海外で働きたいという単純な動機であった。ところが、日本語教育の事を知れば知るほど、日本語教育を取り巻く様々な問題を知ることとなった。それは、「非漢字圏出身の外国人には、どのように漢字を教えていけばいいか」という日本語教育独自の問題から、「公立学校、特に義務教育の児童・生徒に対する日本語教育はどのようにしていくか」という、日本語教育だけではなく、国民全体で考えていかなければならない問題もあるということだった。上田女子短期大学では、科目等履修生としても、日本語教育研究会の会員としても、そうした日本語教育を取り巻く諸問題について考えてきた。

日本語教員は、日本語を上手に教えることも大切だと思うが、日本語教育を取り巻く諸問題をどれだけ把握しているか、理解しているかも大切なことだと思う。それらは、日本語学習者にとっての直接的な問題だからである。日本語教育研究会では、中国からの留学生２人を会員として迎え入れ、日本と中国とを比較しながら、日本語教育をめぐって考えるチャンスを得ることができた。

日本に住む外国人の姿は、海外に住む日本人の姿とかわらないと言われている。もしかしたら、彼らは数年後の私の姿なのかもしれない。「日本語教師になりたい」という夢は、ますますふくらんでいくが、その理由は、海外に住みたいからというものではなく、日本のことを知ってほしい、日本人のことを知ってほしいという積極的なものに変わってきている。その夢に向かって、まず地域に住む外国人のみなさんと、私が持っている力の限り接していきたいと思う。

末筆となってしまいましたが、ご指導いただいた大橋敦夫先生に深く感謝いたします。

（なるさわ　みき／科目等履修生〈信州大学大学院生〉）